



日本記者クラブ

## 「被害者報道を考える」(1)

高橋シズエ氏（地下鉄サリン事件被害者の会代表世話人）

河原理子氏（朝日新聞社会部記者）

2018年2月21日

神奈川県座間市で起きた9人殺害事件では、被害者の実名、顔写真報道について議論が巻き起こった。被害者への取材・報道はどうあるべきなのか。地下鉄サリン事件で夫の一正さんを亡くした高橋シズエさんと犯罪被害者の取材を長く続けてきた朝日新聞社会部の河原理子さんにうかがい、参加者と活発に意見交換をした。

司会：瀬口晴義 日本記者クラブ企画委員（東京新聞）

[YouTube 日本記者クラブチャンネル動画](#)

©公益社団法人 日本記者クラブ

**司会＝瀬口晴義 日本記者クラブ企画委員**  
**(東京新聞)** 日本記者クラブでは「被害者報道を考える」という研究会を立ち上げまして、きょうが第1回目の会合です。

去年(2017年)、神奈川県座間市で未成年を含む9の方が亡くなる事件がありました。そこでほとんどのメディアは実名、顔写真つきで被害者のことを報道したのですけれども、さらしものになっているのではないかという声が社内でも湧き上がりまして、相当議論になりました。いま、社内でも勉強会を始めているのですが、おそらくマスメディアの中でも相当現場は悩みながら、葛藤しながらいろんな議論をしているのではないかと思います。

そこで、改めて被害者報道のあり方についてメディア横断的に考える場をつくれないうことで、この会を発足させた次第です。2回目以降は弁護士さんなどをお呼びしようと思っています。

今日おいでいただいた高橋シズエさんは、地下鉄サリン事件で霞ヶ関駅の助役だった夫の一正さんが犠牲になられました。その後ずっと地下鉄サリン事件被害者の会の代表世話役を務められています。先日、オウム裁判が終結しましたが、そこでも高橋さんは記者会見を開き、多くのメディアにコメントをされていました。非常に長い間メディアの取材を受け続けて、いろんなことをお考えになっていると思います。

もう一人、朝日新聞の河原理子さんにおいでいただきました。河原さんもずっと犯罪被害者の取材を続けてこられて、高橋さんと河原さんが中心になって、メディア横断的な勉強会を10年以上続けてきたという歴史もあります。

まず、高橋さんから、いままで取材を受けてきて感じたことを中心にお話いただき、その後、河原さんにお話をうかがい、その後会場とディスカッションをしていきたいと思っています。

では、高橋さん、よろしくお願いします。

**高橋シズエさん** 高橋です。よろしくお願いします。

1995年に犯罪被害者になって一番驚いたことは、裁判にかかわるということでした。法廷に被告人の家族の傍聴席があっても、被害者の傍聴席がない。それで、私は抽選に並んだわけです。やっと当たって傍聴席で聞いていても、その中で何が行われているのかということが全くわからない。説明してくれる人もいなかったという状況でした。

あと、法廷に遺影を持ち込んではいけないと言われました。私は、カバンに入らない主人の大きな遺影を持っていったのですけれども、預けるように言われました。

医療的なことではPTSD(Post-Traumatic Stress Disorder: 心的外傷後ストレス障害)。いまでこそ心の病気というのはわかるわけですが、地下鉄サリン事件の被害者が何と言われているかということ、「愈けている」とか、医者には「気のせいです」と言われた。そういうように理解されなかった。結局、被害者は何も言えなくなって、ただ固まって我慢しているだけという状況でした。

それから被害者の会ができて、大勢が集まって声を上げるようになりました。どういうことを言ってきたかということ、そのころは「メディアスクラム」という言葉を知らなかったわけですが、強引な取材をしないしてほしいとか、傍聴席とか意見陳述など、司法制度の中で被害者の権利を認めてほしい。経済的な補償も充実させてほしい。地域や職場などで被害者への理解を深めてほしい。被害者の健康にも配慮してほしい。こうしたいろんなことを要望してきました。その結果、2004年に犯罪被害者等基本法ができて、その翌年に具体的な施策である基本計画ができました。

これは残念ながらテロ事件の経済的な救済には適用されなかったのですが、刑事裁判の被害者参加制度が取り入れられました。オウム裁判では、最後まで逃亡していた高橋克也の裁判で私は被害者参加制度を利用することができました。本当に被害者の権利が広まってきたなということを実感しました。

23年間ずっと取材され続けて、最初に驚い

たのは、やっぱりメディアスクラムです。メディアが押しかけてきて、連日のように夜中までずっといて、食べることも寝ることもできなかったという状況でした。

主人が亡くなったわけですから、親戚の人も来たり、友人も来たり、近所の人にも心配してくる。葬儀もしなければならぬ。会社で主人の事後手続もしなければならぬ。警察が事情聴取に来るのです。起訴の前、検察庁に行って調書をとられる。いろんなことが初めてのことで、大変なのです。そういうことがドーッと押し寄せてくる。そういう中で、ドアの外側にはメディア、取材の人たちがたむろしていたという状況でした。

その時点では、メディア、記者の人たちというのは、私の生活を邪魔する存在でしかなかった。

被害者支援をきちんとやらなければいけないという社会の機運がだんだん高まってきて、その当時、被害者支援が進んでいると言われていたアメリカに被害者支援の研修を受けに行きました。その中でメディア対応の支援も行われていたので、私自身の体験から、日本でも犯罪被害者とメディアがうまくやっていく方法がないかと思って河原さんにご相談しました。それから犯罪被害者の声を聞く勉強会というのが始まったわけです。

ちょうどそのころに放送人基礎研修というのが始まって、私が最初に研修部長さんに「各社の中で筋を通すという、いわゆる先輩から後輩に伝えていけるような、そういう研修を」と言われました。

具体的に私の話で言えば、会社の中では新人がダイヤモンドみたいに大事に扱われていて、でも、事件が起きて被害者のところに取材に行ったら、遺族から「何だ、帰れ」と怒鳴られることもある。時には熱いお茶をぶっかけられることもあるんですよ、みたいな話とかもしました。でも、放送が終わったら、「取材をありがとうございました」とか、社内とか視聴者の人から反応があったら、そういうものを取材した人にきちんと伝えて共有して欲しい、そ

ういう具体的な話をしてきました。

もう一つ、研修部長さんには「研修生には謙虚ということを知ってほしい」と言われました。私はそれをどう伝えていったらいいのか、なかなかわかりませんでした。

『私にとっての地下鉄サリン事件』という本を、事件発生から12年のとき（2007年3月）につくりました。この本には、村上春樹さんにも寄稿していただきました。

村上さんの文章の中に「謙虚」という言葉があったのですね。『アンダーグラウンド』（1997年）という本を書かれたときに、被害者への聞き取りを重ねて行く。そのたびに、自分は被害者の前で謙虚にならざるを得なかった、という文章が書かれていたのです。

放送人基礎研修ではこの『私にとっての地下鉄サリン事件』を教材に使っていただいていたので、村上春樹さんの部分をいつも読み上げていました。

そうやって勉強会と研修を重ねて行って、私としては報道被害にならないように、自分なりにできる限りのことをしてきたつもりです。いま現場がどうなっているのかはあまりよくわからないのですが、改善されたと思いたい。そうやってよくなっていると信じたいのです。被害者のためにも事件で何があったのかを伝えてほしいですし、間違った報道とか間違った情報がネットで拡散するようなことを防止するためにも、正確で詳細な被害者報道をしてほしいと思います。

### パソコンの速記係？

ただ、最後の被告人になった高橋克也の上告棄却の記者会見で、これは何？ と思ったことがありました。ほとんどの記者の人がパソコンの速記係みたいになっていたのです。打ち込むロボットが前に広がっている、そんな光景を目にしました。発言の後に記者からの質問を受ける時間があるのですが、「いまのお気持ちは」とか、「23年を振り返ってどうですか」と。私としてはその質問をそのままあなたに聞きたいというような、すごく答えにくい質問が相変

わらず続いていたのでした。

私は、23 年も取材を受けたり、会見をしたりしているのですが、おそらくそういう質問が来るだろうと予想できるからいいのですが、普通はそうではありませんよね。事件直後の人とか、そういう人たちは何を聞かれるかわからない。そこで突然「いまのお気持ちは」と言われたって、答えられないと思うのです。難しい。ですから、できればもっと丁寧な質問をしていただいたほうがいいのではないかと思いました。

きょうお手元に配付していただいていますけれども、読売新聞の警視庁キャップだった三沢明彦さんの寄稿文をつい最近みつけました。実は三沢さんに私たちの「事件から 20 年の集会」の講師をお願いしていました。ところが、集会の直前になって体調を崩されて、ご登壇がかなわなかったのです。集会が終わりまして、その後お体の調子はどうなのか、すごく気になって連絡をとっていたのですが、ずっと連絡がつかなくて、そんな折にこの記事を見つけたのです。

すごいスクープを書いて、でも、それを「ほんのひとこまにすぎない」と最後の段落に書いてあるのです。これを読んで三沢さんのすごく苦しいお気持ちが何となくわかるような気がしました。連絡がつかなかったのもこういうことだったのかなと思いました。私もこの事件のことや被害者のことをしっかり伝えていかなければいけないなと思いました。それが、三沢さんの命をかけた報道に報いることになるのではないかと思っています。

もう一つ配布しましたのが熊本日新聞の記事です。大きな記事の一部なのですが、私はこの記事のための取材は受けていません。でも、この記事のとおりなのです。これは共同通信の増永修平さんの記事です。

それから『オウム法廷』という 15 冊の文庫本があります。私はこの本の中に何か所も登場するのですが、著者の朝日新聞の降幡賢一さんに取材されたことはありません。降幡さんとは裁判の開廷前とか休憩のときに廊下で話したり、裁判のわからないことを、「あれはどうい

うことだったんですか」とたずねて教えていただいたりしていました。そういう中で私は降幡さんに観察されていたのかなと思っています。

同じことは江川紹子さんにも言えることでした。江川さんにもいろいろ書いていただきました。

取材しないで記事にするということではなくて、もちろん事実を話して、それを報道してもらうということが一番のことなのですけれども、20 年もたてば、こうやってふだんのやりとりを重ねて、そういう中から信頼関係があればこそ、こういう記事も生まれてくるのかなと思っています。

事件から何年くらいからでしょうか、風化ということを知ることになりました。そのたびに、だから何なの？と私は思うわけです。20 年もたてば歴史の 1 ページ、1 行でしかないということだと思います。報道の量から言えば、やっぱり風化は仕方がない。でも、被害者にとって風化はないのです。私は、あの日の出来事はきのうのこのことのようによく覚えています。ですから、被害者に向かって「風化」と言わないでほしい。

### **被害者にとって風化はない**

「風化と言われてはいますけど」と言われると、その風化を防止するのが私の役割ですか、としか受け取れないのですね。そうではなくて、風化防止のために取材に協力しますという姿勢でいたいなと思っています。

オウムの場合には後継団体が存在していますから、長い歴史は年を追うごとに若い記者の人たちは取材しにくいと思うのです。なので、都合のよいようにたやすい取材に走ってしまう。結局、それが不正確な情報になってしまったり、不明瞭な記事になってしまったり、時にはそれに尾ひれがついて、ネットで拡散されてしまうということになりがちです。

私がお願いしたいのは、23 年前、もっと正確に言えば、坂本事件の前からオウム真理教がどういう団体だったのか、そういう実態を正確に把握したうえで、その後の折々の報道をして

いただきたいなと思っています。以上です。

**司会** ありがとうございます。では、河原さん、お願いします。

### **性暴力被害の裁判に衝撃**

**河原理子さん** こんにちは。河原と申します。朝日新聞の記者をしています。

きょう、何で私がここにいるかという、先ほど高橋さんからお話があったように、高橋さんや、あるいはその隣にいる瀬口さんも一緒にすけれども、事件・事故の被害者になった方、その家族が本当にどういう体験をしたのか、取材報道に対してどういう思いを抱いていらっしゃるのか、まずは丸ごと聞いてみましょうという、有志の記者たちが集まった「犯罪被害者の話を聴く勉強会」をやってきたからだと思います。

私が高橋さんに最初に会ったのは事件の翌年だったと思いますが、オウム事件の取材で高橋さんに会ったわけではなくて、多分多くの記者の人たちとは全然違う接触の仕方をしたのだと思います。私が事件・事故の被害に遭った人たちの話をぽつぽつ聞くようになったのは1995年以降でした。地下鉄サリン事件が起き、阪神・淡路大震災が起きて、後になってから「日本で被害者、被災者が再発見された年」だと言われていますが、戦後50年でもありました。

私は、それまで戦時下の被害について取材をしております、そこから現代の被害が一体どのように扱われているのかに関心に移り、最初は性暴力被害がいまの法廷でどのように扱われているのかを知りたいと考えて、あいた時間、東京地裁に傍聴に通うようになりました。

当時はいまのような被害者保護制度はほとんどありませんでしたから、訴え出ても、法廷でいわゆるセカンドレイプと言われるような、過去の性体験を聞かれるなどひどい目に遭うのだと、本では読んではいました。ただ、いくら何でも20世紀も終わりになってそんなことがあるはずはない、と思って傍聴に行ってみたら、書いてある通りで、びっくりしました。これは何なの？と非常に衝撃を受けて、最初「性

暴力を考える」という連載を書いたら、性暴力被害に限らず、いろんな事件・事故に遭われた方、そのご家族から手紙が来るようになりました。

それで、その方々を訪ねていきました。96年、警察庁が当時の言葉で言えば被害者対策、いまの言葉で言えば被害者支援を始めたころでもあり、そんな動きを取材しながら被害者支援をしている人たちを訪ねたり、その勉強会などに入れてもらって一緒に研究をしたりしている中で、高橋さんがあるシンポジウムで発言をされているところに私がいたのが最初でした。

当時の高橋さんは、いまよりもうちよつと、傷を負ったハリネズミがワッと針を立てているようなたたまいもありましたが、おかしいと思うことはきちんとおっしゃる方でした。

それから高橋さんと話すようになりました。2000年、アメリカの被害者支援は一体どうなっているのか知りたいと、高橋さんたち4人の遺族が、常磐大学の長井進先生をコーディネーターにしてアメリカ研修旅行に行くことになり、その日程の一部に私も同行しました。そこで高橋さんがショックを受けたことの一つが、アメリカの被害者支援組織は、被害に遭った人たちに対してメディア対応のアドバイスもしているということでした。

そのときは地下鉄サリン事件から5年ぐらいたっており、高橋さんは裁判傍聴を続けて、しばしば会見をしたり取材を受けたりしていたわけですが、誰もそういう報道対応のアドバイスをほとんどしてくれなかった。

本当に徒手空拳で、海外メディアからの取材も週刊誌の取材も、ありとあらゆるメディアの取材を受けてきたわけです。事件まで、一度も取材を受けたことがなかったのに、突然被害者の遺族になって、取材の嵐にも巻き込まれた。取材について、わからないのが当然です。でもそのことを、取材する側の私たちは理解していなかったと思います。

高橋さんの苦勞を、時々聞くことができました。例えば、ある裁判についてコメントを求め

られて、各社それぞれに毎回同じ話をしなければならぬのがすごくつらかった。何人目かの記者がようやく「高橋さん、それだったら記者会見をすれば一度で済むんだよ」「コメントを書いて、司法記者クラブの幹事社に連絡して出す方法もあるよ」と教えてくれた。「そういうことがあるのだったら、何で最初に教えてくれないのか」と高橋さんに言われたのが、私はすごく印象に残っています。

アメリカでNOVA(National Organization for Victim Assistance 全米被害者支援機構)を訪問した際に、高橋さんが「メディアのことですごく困っている」と話すと、NOVAの人は「そうだよ。メディアは大事だ。効果的なプレスリリースをつくらなきゃね」と、まるで話がすれ違っていた。

私も、いろんな被害者ご遺族の話を聞いていく中で、教えられたり学んだりしたことがたくさんありましたが、その一つが、「私たち取材する側は何で説明不足なのだろう」ということでした。先ほどの高橋さんの会見の話もそうですし、説明しておけば取材相手の不安を減らせたかもしれないということがありますよね。自分の苦しい体験を話すのは基本的に辛いことで、それを話してくれる人に対して、例えば、きょう私はこれをすぐ書いて急いで記事にしなければならぬのか、もし間違えて、後で、あ、しまったと思ったことがあったら、連絡すればまだ間に合うのか、など、話せる範囲で説明することはできるはず。そうした説明をするだけでも、取材を受ける方の心持ちが違うのではないかと思います。

### **心に響く手紙と響かない手紙**

また、記者は、それぞれの正義感を持って取材をしているのだと思いますが、それがいかにすれ違っているか、空回りしているかということも感じさせられることがありました。

ある時期から、ご自宅に突然ピンポンと行くより、手紙を書いて置いてきたらどうだろう、となった。それで、ある著名事件のご遺族に、大勢の記者が手紙を書いたのですが、後で、当のご遺族に聞いてみたら、「手紙がたくさん来

ただけけれども、心に響くものがほとんどありませんでした」と言われたことがあります。

知る権利とか報道の使命とか、そういうことがいっぱい書いてある。「これは私たちに言うことですか?」と。そうですよね。言う相手が違うわけですね。「心に響く手紙というのは、自分も親として感じることなど、個人として書かれた手紙だった」と聞きました。

ただ、私自身は、自分が「被害者だったらこう思うだろう」などと知ったつもりでいて、ほんとうの姿はちっともわかっていなかった、ということに、いろいろな被害者の話を聴くようになってから気がつきました。

駆け出しのころ全国紙の記者はみな事件・事故を取材します。そうやって私自身も突然被害者になったり、ご遺族になったりした人に取材をしたことがなかったわけではない。にもかかわらず、この人たちが、かつては知らない間に裁判が終わっていたり必要な情報を知らされないことで苦しんでいた、あるいは家族の中では苦し過ぎて話せなかったり、出口のない思いを抱えていたり……、こういうことに全然気がつかなかった。一体どうしてなのだろうかと非常にショックを受けました。

そうした体験が、高橋さんたちとの勉強会にも結びついたわけですが、とにかくできるだけ当事者の生の体験を聞かせてもらおうと思ったわけです。

それで、記事としては、最初に被害者をめぐる法制度について、いくら何でも理不尽ではないかということを書いていったわけですが、自分の中でどうしていいかわからず、でも、ずっと重い課題として残っていたのが被害者と取材報道の問題でした。

高橋さんからは「最初にあまりにも嫌な思いをするから、後で記者の人に話したいことや知りたいことができて、怖くて記者に話せない」と言われました。

「そういうふうに最初にすごく嫌な思いをしてしまうから、被害者も伝えてほしいことや知りたいことができて、あれじゃあ……とためらうのでは、記者の人たちにもよくないでし

よ」と。それが勉強会の始まりでした。

勉強会の中間報告として2005年に出したのが『〈犯罪被害者〉が報道を変える』という本です。ここには、数人の大事件・大事故の遺族の話に掲載させていただきました。記者は、多くの人に関心を持ったり、多くの人死傷したりする事件・事故の取材を多くするわけです。けれども、そうでない事件・事故の被害者、家族の人たちからも私は話を聞くなかで、大事件のメディアスクラムとは真逆のことも言われました。

### 取材されないことへの不満も

少年事件の被害者や交通事故の被害者のご家族から「どうして私たちの話を聞きに来てくれなかったのか」と言われたことがあります。「新聞に出ているのは警察の話と加害少年側の話だけじゃないですか。どうして私たちの話を聞きに来てくれなかったんですか。私たちの話をちゃんと聞いてくれれば、うちの息子がけんかをするような子どもではないとわかったはずだ」と。

交通事故でお子さんを亡くされた方からは「うちの息子が亡くなった日は、たまたま新聞休刊日でした。うちの息子は亡くなくても新聞記事にすらならなかった」と言われたことがあります。手がかりを求めたいと思っても、そういう死亡事故があったということ自体が知られていない。そういう話も聞かせていただくことがありました。

この本にも出て来ますが、いわゆる大事件の被害者が「あなたはいいですね、たくさん報道されて」と、ほかの被害者から言われることがある、と。「いいね」と言われても……というところがあるわけですが、それをそんなふうに言われることさえあるという話を聞くうちに、被害者に取材することをやめたら解決するわけではないのだと気がついて、私はますます困るようになりました。

では、どうすればいいのか。事件・事故の直後は一切お断りという人がいるし、たまに、話したいことがある人、あるいは話せる人もいる。

その方がどういう方であるか、私たちにはわからないわけです。

また、報道の仕方は社内で話し合っただけで済ませることができても、事件直後に大勢の人が集まってしまう、先ほど高橋さんが言ったようないわゆるメディアスクラムの問題は、1社だけでは解決できなかった。

何を伝えるのか、という根本的な問題もあります。何で被害者を取材するのか。私が駆け出しのころから言われてきたのは、「悲しみを社会に伝えて共有するため」。それはあながち間違いではないといまでも思いますけれども、実際に被害に遭った方たちに話を聞いてみると、「事件直後に悲しいという気持ちになれなかった」という人が少なからずいました。現実として受けとめ切れない中で、例えばお葬式ならお葬式をしなければならぬ。

高橋さんからも聞いた覚えがあります。

高橋さんがお葬式のときの写真を後でみたら、自分が笑っている写真があつて、びっくりした。何で笑っていたのだろうと考えてみたら、急を聞いて全国各地から何年も会っていなかったお友達とかいろんな人たちが駆けつけてくれて、会えたときに多分うれしかったのかもしれないと言っていました。

それほど、事件直後は特に、何が何だかわからない中で過ごしておられる。感情が凍結してしまうこともあります。でも、悲しそうな写真や映像を撮り、悲しそうな一言をつければ悲しみの報道はできる。それは間違いではないけれど、本当の被害者の姿ではなかったのではないかと。私たちは一体何を、何のために報道しようとしてきたのだろうかということを、私はすごく考えさせられました。

被害者は「悲しみ」一色ではありません。

勉強会などで胸襟を開いて体験を話してくれた人たちの話を聞いていくと、名前話の議論というのはよくあるけれども、そういうことよりも中身、質に対する報道への期待と、質に対する失望が一番大きかったように私には思えました。

## 「悲しい遺族」というストーリーづくり

何人かの遺族から、「どこかに悲しい遺族がいましたというストーリーの消費のためだけだったら、私は取材を受けたくない」と聞きました。二度とこういうことが起こらないように、あるいは真相に近づくためなら協力するけれども、単に表面的なことだけを切り取っていく、その素材ということだったら、取材は受けたくない、と。

こんなふうに、被害者、ご遺族の話で教えられ、鍛えられるところがあり、社内で共有したり、朝日新聞社では「事件報道の手引」というものをつくっているのですが、そこに反映させてもらったりしてやってきました。

一方で、メディアスクラムの問題については、2001年12月に日本新聞協会も民放連も、それぞれ対策の方針を示しました。これは大きな変化だったと思います。

何となくこれでホッとしたところがあったのですけれども、いま再びこうやって被害者の取材報道がホット 이슈になっている。

メディアスクラム対策ができたけれども、事件発生直後はどうしても取材者が集まることがあるし、根本的なところで、何のために被害者を取材して何を伝えようとしているのか、その質を高めるという面では、2001年以降の積み上げがどのくらいできたのか、少しずつ深化してきていると思いますが、振り返るとじくじたる思いもあります。

被害者取材について、一番熱く議論されていたのは2000年前後ぐらいかなというのが私の記憶ですが、メディアスクラム対策ができた一方で、積み残されたいろいろな課題があった。それがいま再び、SNSなどの発達もある中で、さらに拡大して現れているのかなと思っています。

「二次被害」と言いますが、事件そのものが一次被害とすると、二次的にそれに付随して受ける被害があります。これは被害者に接する誰かが起こす可能性があり、取材や報道により受けるダメージも「二次被害」のひとつです。

それで、被害者になった人たちが二次被害を

誰から一番多く受けているかということ、周りの人たちからです。周りの人たちからの、善意や励ましでも当人には非常に傷つく言葉だったり、あるいは心ない噂話だったり。被害者への無理解や偏見もあります。そうしたことが、いまではSNSなどで世界を駆けめぐる状況になっている。

取材、報道においても、積み残しの宿題が、再燃しているのではないのでしょうか。また、2001年ぐらい、21世紀に犯罪被害者支援がすぐ進んで、いろんな人たちが支援に入るようになったなかで、報道界のそれ以降の取り組みは立ち後れた、あるいは外から見えにくいということもあるのではないのでしょうか。

例えば弁護士会では、2000年か2001年に日弁連の被害者支援委員会ができて、いまでは二次被害をできるだけ与えないように研修を組織的に行っています。わたしたち報道界で考えてみるとどうなのか。

朝日新聞社では2000年前後からいろんな模索を始めて、いまは1年目の後半ぐらいの研修に組み入れて、被害者取材について研修をしています。記者は被害者に接する職業です。知らないがゆえに二次被害を起こしてしまう面があるのだとすれば、それは研修である程度は防げるはずですが。

国連の「被害者人権宣言」に関連するハンドブックの中でニュースメディア専門家に求められているのは、専門的な研修と、突然一から議論しなくていいように倫理コードのようなものをあらかじめ考えておく、という2点ですが、この2点は本当に最低限のことで、できることだし、しなければいけないことではないかと思っています。

では、とりあえずここまでで。

**司会** ありがとうございます。

会場との意見交換を多くしたいのですが、まず私から高橋さんに聞いたことがあります。東京新聞の研修で、被害者支援をやっている弁護士さんを招いた時に、こう言われました。「簡単なことだ。メディアスクラムさえなくなれば



ほとんど解決できる」と。具体的に言うと、葬儀の取材は一切やめてほしい。そうすれば、ほとんどの被害者は被害に遭わなくて済む。そんなことをおっしゃっていたんですが、そういう考えについては、どうお考えになりますか。

### 事件直後のメディアスクラムはやめて

**高橋** とにかく感情が混乱しているので、弁護士さんとか支援者がついていれば、アドバイスを受けながら、ということがあるでしょうけれども、おそらく事件当日の時点では、弁護士さんがつくことはない。だから、メディアスクラムはやめてほしいなと思います。

葬儀は、邪魔されるということのほうがイメージとしては大きいですね。葬儀は大事な家族とのお別れ、しかもたった1回しかない、大事なときなのです。黒っぽい服装をして式場に入ってきたら、わからないわけですよ。私は主人のつき合いを全部知っていたわけではないですから、そういう人がいてもメディアだということがわからないで、泣き声をとられたり……。ICレコーダーを持っていたというのが後でわかったんですけども。ほかの人の話も聞きましたが、後で聞くと、何だったのとはすごく不快な思いをするようなことがあった。やっぱりそれはやめてほしいなという思いですね。

**河原** ご葬儀については、少なくとも予定がわかるわけですね。記者クラブはよいか悪いかという議論がありますけれども、葬儀の取材については、葬儀社を通じてなり警察を通じてなり打診をして、葬儀場の中に入らないとか、一言言いたいというご遺族もいらっしゃるので、終わった後でどなたか代表の方がお一人来てくださって、親族としての思いを述べられたりという形が、メディアスクラム対策をつくって以降は一般的かなと思います。

一番お困りになられるのは、それよりも前の事件直後ですね。高橋さんで言えば、その日は家に帰れないようなことが起きる事件直後ではないか。どれだけの人が現場に駆けつけたり、あるいは被害者のお宅に行ったりしているのかというのは把握しづらいので、なかなか難しいところがあるかと思いますが、それは社によ

って行かないという選択肢もあると思います。

**司会** そうですね。ありがとうございました。

きょうは現場の記者やデスク、部長さんも来ていますので、会場から質問を。

**質問** 共同通信の社会部のデスクをしています増永と申します。

きょう、高橋さんが配布された資料にある熊本日日新聞の記事は私が書いたものです。この原稿の扱われ方で不満が1個だけあるとすると、見出しが「夫のため」となってしまったんですが、いまお聞きになってわかるとおり、高橋さんはご主人のことをお話しになるときに「主人」とおっしゃいます。「主人」という言葉が性差別的にどうなのかという議論はあるかもしれませんが、私にとっては、高橋さんの原稿でご主人のことをお話しになるときは、「主人の」と言うほうが普通なので、この見出しは本来「主人」であってほしかったんですが、多分熊日さんのコードにひっかかったのか、「夫」に変わってしまいました。

私は、先ほどおっしゃっていた勉強会にも加わらせていただきました。私は裁判所のクラブに2000年前半から、オウム公判は2002年ぐらいから担当してまして、高橋さんとのおつき合いはその当時からになります。

きょうは「被害者報道のあり方」をテーマにしているんですが、私が胸を張って言えるのは、高橋さん取材の専門家だと言われれば、絶対にそうだとと言えるというところがあります。

うかがいながらいろいろ感じていたんですが、自省を込めて言えば、やりやすい取材に流れるということがあります。高橋さんとは、先ほどもあったようないろんな公判の取材を待っているときとか、法廷の外でいろいろお話しするようになって、だんだんおつき合いが始まっていきました。そうなると、何かあると高橋さんにうかがえばいいやみたいところもあって、だんだん易きに流れてというところもあって――。高橋さんの記事は、直近で言うと、いまごらんいただいている記事ですが、この十

何年間で果たして高橋さんのことを何回書いたのかというぐらい書きました。この記事も書かなければということになって、100行ぐらいの記事ですが、実は2〜3時間で書きました。

おっしゃっていただいたように、取材は全くしていません。全く取材をしていないのに人の人生を2〜3時間で書いてしまうという、ある種の罪悪感もあったんですが、裏返すと、それだけいろいろおつき合いいただいているということでもあって、その辺はよかったかなというところではあります。

去年、高橋さんとニューヨークに行って、9.11のテロ遺族と交流される所を取材しました。弊社で去年1年間通して配信した通年企画の「笑い 命さざめく」というのがありまして、その1回として配信しました。

### PTG—心的外傷後成長

そのときにどういうテーマで書こうかと高橋さんと話していたら、高橋さんが「PTGって知っていますか」とおっしゃったんですね。

ご存じの方がいらっしゃるかもしれませんが、PTGというのは、Post Traumatic Growth。傷が残る「PTSD (Post Traumatic Stress Disorder) 心的外傷後ストレス障害」というのがありますが、心的外傷を得た後に成長するという研究があります。この20年ぐらいのものだそうですが、「そういうのがあるのよ」と教えていただいて、僕は初めて知りました。いろいろ調べてみると、日本の研究者が提唱した考え方であること、9.11のテロ遺族にも、いま大学の先生になってPTGを研究していらっしゃる方がいるということ。いろんなことがわかってきて、高橋さんと一緒に専門家の先生のところへ勉強しに行っているいろいろ学びました。その中で、高橋さんはこの二十何年間成長されているのだなということがよくわかった。

その話と、現地で9.11の団体と交流されているところ、現地の先生の話などを交えて少し長い原稿を書いたんですけども、その取材の合間にいろいろお話をされていると——ここは本来詳しいことを話さないといけないんで

すがちょっとはしよりまして——高橋さんの言葉をかりると、「私の人生はこれでようやくおもしろくなってきた」とおっしゃるんですね。

その詳しい意味するところは高橋さんからお話ししていただいたほうがいいかもしれませんが、振り返って、被害者の支援の波があったときに、高橋さんは「この波に乗らなきゃどうしようもない。いまこそ乗るべきだと思っているんだ」とおっしゃる。

私たちは、ともすると被害者という型に当てはめて、すごく大変な思いをされている方たちだ、悲しい思いをされている方たちだと思って取材して原稿を書きます。もちろんそういう面もあるけれども、それだけではないんだというのを高橋さんとおつき合いの中でようやくわかってきました。被害者報道にはいろんな形がありますが、何事もそうですけれども、謙虚に先入観をなくして、胸襟を開いて、虚心坦懐にお話をうかがうと、いろんな発見があるんだというのは、おつき合いしてから十何年になりますが、改めて最近感じていることです。

一方で、座間事件の話もありました。顔写真をどうするか、実名、匿名の問題などいろいろあります。わが社もいろいろ議論があるのですが、その中でも実名を出して、高橋さんのように顔を出す——この大変さというのはもちろんあるんですけども——顔を出して、名前を出して、そして経験をきちんと語ってこそこうして伝わることもあるのだということは、ここで強調しておきたいと思います。

少し長くなって済みません。

**司会** どうもありがとうございました。

何か補足することはありますか。PTGの。

**高橋** 確かにそういう感覚を持ったのは、いま増永さんのお話にもあった「おもしろい」という言葉だったんですね。

これは、村上春樹さんが『アンダーグラウンド』を執筆し始めたころ、ある新聞にインタビュー記事が載っていて、私はそれを読んでいたんですね。後に、講談社の人と村上春樹さんと会ったときに、私が村上さんに、「新聞のこの『聞き取りをするのがおもしろい』と書いてあ

るのはどういうことですか」と言いました。20年たって自分の人生も、ああ、おもしろいということは何となく感じてきたんです。ですから、村上さんがあのときに言っていたのはこのことかと、いまではわかります。

でも、被害者の聞き取りをするのがおもしろいというのは、当初は全然わからなかったんですね。だから、被害を受けて、それでもそれを包括した人生を築いていくということのおもしろみというのは、いまでもこれは誤解されると思っていて、「おもしろい」という言葉を使うのは怖いんですけども、でも、多分この言葉を理解してくださる人はいるのではないかなと思っています。

自分が一生懸命やって、何らかの自分の人生が築かれていっている。社会の中で自分の位置がわかってくる。あるいは嫌だと思ったことを訴えていって、それが何らかの形で変わってきているということがみえたときには、やっぱり生きていてよかった、こうやっていくことのおもしろみというのがわかるんだという感覚になってきました。これがPTGということなのかなと私もいま思っているわけです。どうぞ誤解しないで聞いていただきたいなと思います。

**河原** 一つ、いまの高橋さんのお話につけ加えていいですか。

増永さんもおっしゃっていましたが、社内で考えたり議論したりするときに、当事者がどういう体験をしているかというのを聞いたうえで議論しないと。取材する側だけで議論していると、いつも同じような議論になり、いつも同じような結論になる気がするんですけど。どんな体験をされているかを聞いてみてびっくりすることがあるので、聞いたうえで考えたほうがいいかなと思います。

**司会** 高橋さん、昔はしばらく黒い服しか着られていないときがあって、あるとき「もう黒い服を着るのをやめた」とおっしゃっていたんですね。あれは何年ぐらいたってからでしたか。

**高橋** 自分が遺族というだけでいろんなところに表出するのは嫌だと思ったときに、黒はやめようという気持ちになりましたね。いまは、

もちろん黒を着ているときもありますけれども、私は遺族ですという、それだけの高橋は嫌だなと思ったんですね。

**司会** そこまで行くまでには長い年月と、葛藤とかいろんなものがあって、そういう境地になられたのではないかなと思うんですけども。

**高橋** そうですね。

**質問** 朝日新聞OBの伊波と言います。大変お二人に敬意を表します。それから大変ご苦労さまだと思います。

新聞記者は、自分は正しいことをやっていて、これが新聞やテレビで報道されることによって正しいことが伝わるから、自分の行動は非難される筋はないという立場でいろいろやると思うので、ご迷惑をおかけしていると思います。

私が最初に被害者の立場に気がついたのは、1961年に仙台にいたときです。松川事件の裁判で被告が無罪になり、支持者の人たちが仙台のまちなかをデモ行進して「万歳、万歳」とやっていたんです。松川事件で蒸気機関車が転覆した。その熱湯で機関士かどなたかが水ぶくれのようになって亡くなった。しかし被害者の遺族の言葉がどの新聞にも一字も載っていない。そのときに、被害者のことをもっと考えたほうがいいのではないかなと思ったのが最初です。

欧米の被害者対策が進む中で、日本の対策はずっとおくれていたと思います。

私は新聞社を卒業するに当たって、刑事司法の中で少なくとも被害者の立場をもっと理解して、先ほど高橋さんがおっしゃられたように、被害者の傍聴席がないのに、ほかの方の傍聴席はあるとか、そういうのはおくられていると思ひまして、改善を訴えてきたわけですが、現在は最初のころよりそういったものは大分改善されているとお考えでしょうか。

新聞記者として反省すると、質問が非常に下手くそで、「あなたにとってこの事件はどうですか」とか、あまり考えもしない質問で皆さんを苦しめていると思うんですが、そういったことは多少は改善されてきているわけでしょうか。その辺をおうかがいしたいと思います。

**高橋** 改善されてきていると思います。でも、私に関して言うと、オウム事件は、いま若い記者の人たちは、実体験としてあまりお持ちでないと思っています。坂本事件は1989年ですから、それから考えたらもう30年ぐらいになるわけで仕方がないとは思いますが、ただ、日航機墜落事故のご遺族の事務局長の美谷島さんなどは、「私たちの事故に関するものを全部読んでから取材に来てください」と。私たちの勉強会でもそう言っていました。それが当たり前なのかなとは思いますが、オウム事件はとにかく事件数が多いからなかなか大変で、そこら辺は難しいのかなと思います。質問はそれこそ「いまのお気持ちは」で終わってしまうような感じですね。

**質問** 新聞記者は、持ち場から飛び出して、何もわからずに現場に行って、向こうで聞けばいいやと。こういう体質なんですよ、大体は。

### 「ところで、どなたを亡くしたんですか」 の問いに取材を拒否

**高橋** 大手の記者の方ではなかったんですけども、私が一番ショックを受けたのは、「私は偏見を持たないで高橋さんのところにきょう来ました。ところで、どなたを亡くされたんですか」と言われた。そういうこともありましたので、もちろん「すみません。お答えできません」とその取材はお断りしましたが……。いろいろな経験はしてきました。

**河原** いまの話を最初聞いたときはすごくびっくりしたんですけど。ほかに少なくとも2人の別の事件・事故のご遺族から、「ところで、どなたを亡くされたんですか」と聞かれて、その瞬間取材は終わりました、と聞いたことがあります。

**司会** あまり昔と変わっていないのかもしれませんが。

**質問** こんにちは。読売新聞の小松と申します。94年から4年ほど司法クラブにいましたので、高橋さんに名刺を渡した中の一人です。

先ほど、記者が自分は正しいとか、現場に行

くときに何も考えずに行くとかというお話がありましたけれども、いまはそういうことはございません。そうしたことがないように研修させています。

私自身も事件・事故の原稿を書くときに自分が正しいと思ったことはありません。

どうしてかといいますと、ちょっとだけ前提を話しますが、私は記者1年目から連続幼女誘拐殺人事件を担当しました。ひどい取材でしたし、ひどい指示をされました。詳しくは言いませんが、二度とこんなことはしたくない、二度と被害者の取材はしないと、「警察はもう嫌です」と言ったら、裁判所に行ってたくさんの方の被害者の方を取材することになりました。

その連続幼女誘拐殺人事件の判決のときも、なぜか私は裁判所クラブ担当でして、そのときに被害者のお名前をどうするんだということになりました。私自身は被害者のお名前をいまでもそらで言えるぐらい書きましたので、覚えています。結果的に判決報道では全て匿名にしました。その後、2005年の個人情報保護法成立もあり、いまは被害者の報道というのは匿名が正論ではないのか、という動きもあります。

弊社は、実名ですということを掲げていて、座間事件では、起訴のときに、ネットには流さない、しかし紙面では1回だけ書くということを社として決めました。

事件により本当にそれぞれで、それぞれについて、パターンがこうだとか、一定してこうだということは言えないことはわかっているんですが、被害者の実名報道、匿名報道、または実名にする場合の書き方、事件に遭った詳細を書くべきなのか、そうでないのか。もしご意見があったら聞かせていただければ。

**高橋** 私は、その事実がAさんとかBさんだとうい匿名だったら、勝手に書かれてしまうとか、いまネットで拡散されてしまうということのほうが怖いなと思っているんですが、そう思えるのはいまの私であって、事件直後の人がどう思うかといったら、私はいま言い切れないものがあります。

**河原** 被害者の取材について、小松さんが補

足していただきましたが、各社、研修や引き継ぎなどでちゃんと徹底して、当然ながら事前に準備して、勉強してから取材に行くということを記者教育の中でやっていると思うんです。

ただ、実際に被害者遺族の方たちに話を聞いてみると、先ほどの高橋さんの話のようにびっくりする取材があるし、報道に対して引っ掛かりを持っていらっしゃる方がいる。自分の周りを見て、みんなちゃんとやっているはずだと思っても、行き届かないというか、あるいは知らないからなのか、わざとなのかはわからないのですが、そうでない面もある。

私はなぜ研修が大事だと叫んでいるか。各社で本来やるべきものだと思いますが、そういうものを受ける機会がない取材者もいると思うんです。東京の警視庁担当記者のようにずっとトレーニングというか、事件・事故のことを毎日考えてスキルも持っている記者ばかりではなく、例えば地方で人が少なく、午前中は銀行の会見に行き、午後は事件取材に行くといったこともあると思います。

研修も自前でやれと言われても、なかなか知恵が浮かばなかったり、地元でよい講師が見つからなかったりということもあるのではないのでしょうか。放送界では、高橋さんが講師を務めてきた放送人基礎研修のように、NHKと民放連が一緒になって研修をして一コマ「被害者取材」を必ず入れている。反響もすごくあると聞いています。そのような機会、いろんなところで受けるチャンスがあったほうがいいのではないかと考えている次第です。

**高橋** 私は、被害者支援センターにいた期間があるんですけども、被害者支援が行われているということも広く知ってもらったほうがいいと思って、「メディア対応をしたほうがいい」と言ったんですが、ことごとく「それは必要ない」みたいなことを言われたんですね。

それで結局、私はそこを抜きに、河原さんにもご相談して勉強会が始まったんですが、本来でしたら支援者はメディアの事情をちゃんと知るべきだと思うんですね。どういうふうに報道するかとか、例えば私は弁護団がいましたか

ら、弁護団が最初から幹事社と相談して、いつすれば効果的に報道してもらえるかとか、私はそういうことがわかってきたんですが、大部分の被害者の遺族は何も知らないと思うんですね。

弁護士さんは知っているかもしれないんですが、支援センターの人もそういうことを知るべきだと思うし、もちろん個人としても、例えば学校でもメディアの教育を取り入れた方がいいと思うし、むしろメディアとはこうなんだという仕組みとか事情とか、皆さんの心意気とか、皆さんがそういうものも伝えていく必要があるのではないかと考えています。

これを一番感じたのは2009年でしたか、兵庫県で行われた大規模な対テロ訓練があったんですね。訓練をしているのは、学生が被害者になって、自衛隊とか消防とか警察とか、いわゆる被災者にかかわる人たちは訓練に入りますが、メディアはメディア席で取材しているんです。何でと思いましたね。何でその訓練の中にメディアが入らないのか。何でだろう。いまでもそれは不思議に思っています。

だって、災害報道というのは必要なことで、私は主人がどこの病院に運ばれたというのをテレビで知って、それで駆けつけたというのがあるので、メディアが遠慮し過ぎというか、もっとみんなの中に入って行って、報道がいかにか大事かということもみんなにわかってもらう、そういう活動と言ったら変ですが、みんなにわかってもらう努力があったらいいのではないかと考えています。

**質問** 毎日OBの橋場と言います。お二人、どうもありがとうございました。

被害者報道というのは本当に難しい、いろんな側面があるので、この場であらゆる課題を語るのは無理だと思います。河原さんも指摘されたように、2001年に新聞協会でもメディアスクラム対策を出しました。私は当時毎日新聞のメディア面を担当していたものですから、その委員の一人として策定に参加しました。その後、上智大学に行ってジャーナリズムを教えて、メ

ディアの様子を外からみることになりました。犯罪報道だけでなく、多くのメディアの課題をずっとみていると、何で同じことをいつまでたっても繰り返し繰り返し、同じ場所に戻りつつやっているのか、といらいらしていたんですね。その一つがこれです。

### メディアスクラム対策 現場に届いているか？

メディアスクラムが被害者報道の問題の一つであることは間違いないんですが、では、当時出したメディアスクラムの対策を現場の記者たちがちゃんと守っているのかというのを疑問に思うてしまうんですね。

テレビの人にはちょっと失礼な言い方になるかもしれませんが、そういうのが一番わかるのが映像としてのテレビです。例えばメディアスクラムの2年ぐらい前に、犯罪の報道に関して、人権をもっと大事に考えようよという中で、呼び捨てでなくて、「容疑者」と呼ぶようにしようとか、手錠をはめられて警察構内を移動するときの映像をやめようとか、幾つか申し合わせをしたはずですね。だけど、いまみると、そういうのをすっかり忘れたかのように復活しているような印象を受けています。

ですから、放送人基礎研修で被害者取材のこともやっらっしゃるそうですが、果たしてどれだけ現場に届いているのか。現場の方に聞くべき事ですが、メディアスクラム対策にしても、新聞協会が出した後の雰囲気、間接的に聞いていても、新聞協会が声明を出しても一線の記者には本当に届いていないというか、それぞれの会社に帰ると、もう忘れてしまっているような気がしていました。ずっと。

難しいことも確かで、社内研修をやるにしても、地方支局の例えば新人さん向けの研修と、本社である程度経験を積んだ記者に教えるのでは多分違うだろうし、それから事件の発生の仕方によっても随分違う。例えば飛行機事故とかサリン事件のように被害者がいっぱい出たときにどうするかとか、時間の経過によっても随分対応が違うわけですね。ですから、それを一律で協会の声明とか何かでまとめるのは難しいわけですから、ご存じのようなスタイル

でしか出していませんでした。

いま反省すると、代表取材を仕切るのは現場の記者クラブがやれということを行いましたけれども、記者クラブが仕切るにしても、どう機動的に実際の現場の状況に応じてやるのかというところまでは踏み込めなかった。そこは課題として残っていたわけです。ですから、本当に柔軟に物事を考えなければいけないわけですね。

いま、現場でどうなっているのかということも知りたい。河原さん、司会の瀬口さん、あるいはきょう来ていらっしゃる現場の方にもうかがいたい。

研修で大事だなと思うのは、やっぱりデスクあるいはキャップですね。現場の記者に指示をするときにどんな注意をして取材に向かわせているのか。その辺の問題もないがしろにはできないのではないかと思います。

結局、業界として考えると、一つは仕組みをつくること。マニュアルにしても申し合わせにしてもそれをやること。各社の現場の一線の記者がそれをどうやって肌身で実感して現場に行くようになっているのかということが一つ。

もう一つは、河原さんも指摘されたように、つまり、報道の質です。何のために取材するのか。これは専ら社全体、第一線の責任者はデスクですから、そのデスクの意識をどうやって変えていくのかということに尽きるのではないかと思います。

もう一つは、高橋さんがおっしゃいましたように、ずっと昔からある問題として報道と被害者との関係があるんですが、昔は新聞とかテレビがメインストリームでしたから、新聞やテレビがしっかり対策すれば何とかなったかもしれない。何とかするために業界としても考えてきたわけですが、いまはネットがある。そのコントロールがきかなくなっているわけです。それをどうするかというのが原題的な問題だと思います。

実名か匿名かというところでは、新聞やテレビが匿名にすればいいかということ、そんなことはなくて、それでも調べ上げてきてしまうネッ

トの人たちがいるわけです。蛇口を絞れば済むという話ではないということ。ネットという仕組みを理解したうえで、それをどうしていくかという問題があると思うんです。

僕の浅い知恵で言えば、結局、彼らがやっていることは、基本的には違法あるいは不法行為です。プライバシーの侵害とか、名誉毀損とか、あるいは侮辱だとか、そういうことになるわけです。先ほども紹介されましたように、被害者が最初に二次的に被害を受けるのは、周辺の人からです。周辺の人というのは、身近な世間です。その身近な世間がどういうふうにあるべきかというのは、文化の問題になってしまうので、メディアだけの問題ではとても解決できないと思います。

SNSなどのネットで広がる情報というのは、まさに身近な周囲の人たちの悪い面みたいなものが世界中に広まってしまふ。お互いにやりとりするなかで、拡散したりして広まってしまふわけです。ですから、そこはある程度厳しく対応するべきだと思う。メディアも被害者も司法も、あらゆるところで厳しく対応するという知恵をこれから出していかなければいけないと思いますね。

そのことについてはまた別の機会があるかと思えますけれども、感想も含めて、以上です。

**河原** いま、橋場先生から多岐にわたる論点でお話をいただきました。

一つは研修についてですが、現在の1年目記者研修では時期を分けて話をしています。被害直後、急性期、その後。要は、タイミングがすごく大切です。どのタイミングでどのようにアプローチをするのか、どんなことを聞いたり、お話ししたりするのか。

強制研修のよいところでもあり、欠点でもありますが、座っていても上の空の人がいないとは限りません。でも、勉強会だと関心のある人しか来てくれないんですね。一番聞いてほしい人は来てくれないので、そういう意味では、とにかくその場に来て聞いてもらう研修は意味があると思っています。

それで行き届かないとしても、とにかくでき

るだけその機会を提供するしかないと思いますし、最終的にそれで響くかどうかというのは、その人が真剣に困って考えているかどうかということだと思います。

先日、社内の1年目研修を見学しましたが、ものすごく真剣でした。それは現場で困っているからだと思います。大学を卒業してすぐ事件現場に取材に行ったり、被害者の話を聞いてくるように言われたりして、迷い、手がかりを求めているから、必死に聞くのだと思います。そういう人にはしみていくように思います。

取材現場がどれくらい変わっているかは、私はこの3年余り地方勤務をしていて、あまり最近の状況を見られていないのですが、メディアスクラム対策ができてしばらくの間は各地の現場を見に行きました。そこでみている限りでは、かなり意識されていたように思います。

これもご遺族に聞いてびっくりしたのは、別の取材現場から来たカメラクルーだと思うんですが、かつては、花柄のシャツを着ていたり、喪服の人たちの中ですごく目立ってしまうワークウェアで来る取材者がいた。メディアスクラム対策が出た後、各地でみた限りでは、カメラの皆さんも、喪服でなくても黒っぽい服を着るなど、自分で考えて行動していました。最低限のマナーみたいな話で恐縮ですが。

ただ、それから時間がたっていますし、どんどん世代も変わっているので、いまの現場に行く人や指示をする人たちが、どのくらい、あのかのときのひりひり感みたいなものを知っているかは、わかりません。でも、全体的に言えば、私の上の世代より、いまの若い世代のほうが、被害者取材だけでなく、何事にも丁寧だと思います。

**司会** ありがとうございます。

では、今回、事件の現場に近いところにいる人の話なども聞きたいと思います。指名してもいいですか。東京新聞の警視庁のキャップの大野君が来ていますので、メディアスクラムに関して、一部でもいいので知っていることを。

**質問** 上司から指名を受けました、東京新聞で警視庁キャップをやっております大野と申

します。もうすぐキャップが終わりますが、次はデスクなので、また指示する側の立場になるものですから、きょうはぜひともうかがいたいと思って来ました。

座間事件は被害に遭われた方が非常に多かったものですから、弊社としては、日ごろ事件取材をしない遊軍の記者などもご遺族のところに行きまして、ふだん警視庁で担当している記者は捜査員のほうを回るといって分担していました。

当然捜査員、捜査一課長、捜査幹部のところには各社が押し寄せるんですけども、その辺は日ごろから取材になれている人たちなので、特に大きな問題は生じなかったんですが、被害者遺族のところではメディアが押しかけて、110番されるといってがたびたびあったように聞いています。

ただ、指示する、行けと言う側からすると、メディアスクラムをしたくてしている記者は誰もいませんし、かといって、メディアスクラムをしませんとなると、被害に遭われた方がどんな人かわからないままその事件が進んでいくということにもなりかねない。「私たち、取材しません」というのもなかなか自分たちで言いづらいですし、先ほどからお二人の話を、どうすればいいんだろうと頭を抱えながらうかがっていました。先輩として河原さん、何かサジェスションをいただけないでしょうか。

### 事件直後でないと聞けないことなのか？

河原 被害者宅のメディアスクラムについてですか。どういう人が知りたいというのはあると思いますし、もしかすると被害者側も伝えたいこと、知ってもらいたいことが生まれるときがあるかもしれないと思いますけれども、あえて言えば、それは事件発生の直後でないと聞けないことですかね。少なくとも、大勢が取り囲むことで生活できないような状態にすることは控えなければならぬと思います。

「ちゃんと聞いて伝えたい」という思いを何らかの方法で伝えること、アプローチは必要だと思っています。自分が何者で、どういうこと

で話を聞きたいのか、連絡先を書いて、送るなり人を介して伝えるなり、ご迷惑にならない範囲でアクセスを試みることは、必要ではないかと思います。話したいときが来るかもしれない。待つことも必要になります。

「取材というものを受けたことがないし、マスコミというものがどういうものか全くわからなかったの、とにかく怖くて最初は断ってしまった」と言った人もいました。

できるだけ長いスパンでみて、お願いするしかないのではないかという気がします。

地下鉄サリン事件でも、事件から数年後に初めて取材を受けた方がいらっしゃいました。

一方で、例えば大学などで話をしたり、若い記者に話をしたりするときに、前提として「被害者に取材することは悪いことだ」と思っている人が多いのではないかという気がするのです。記者で言えば、罪悪感を抱いていたり、大学生で言うと、「悲しいとわかっているのに何でわざわざ『悲しいですか』と聞きに行くんですか」と何度か詰問されたことがあります。

そのとき私が答えたのは、本当のことは聞いてみないとわからない。こちらが全然思ってもみなかった体験をされていたりする。それは事実近づくという意味においてもそうですね。被害者が目撃者である場合もありますし、その事件を多角的にみるという意味においてもそうです。私が頭の中で考えている、「被害者はこういうものだろう」とか「被害に遭ったらこういう行動をするだろう」というのとは、桁違いの体験をされていたり、想像が及ばなかったりする。申しわけないけれども、それは直接教えていただかないとわからないですね。

でないと、先ほど言ったようなステレオタイプな「悲しい被害者がいました」というのをサーッと流すだけになっていって、ただの物語の消費になってしまうと思うのです。

本当のことはちゃんと聞かなければわからないし、丁寧に聞かなければわからないので、そういうふうに接するやり方をもう一つのやり方として続けていくしかないのかなという気がします。



できればそれによってなし遂げられた積極的なよい被害者報道みたいなものを、こういうのがあるんだよ、なるほど、とみんなが思ったり、あるいは記者たちが目指したりできるように、1年に1回、これはいいよという被害者報道を選ぶとか、アメリカのような制度ができたらいいなと思っています。

**高橋** 相模原の事件で、私は同じような施設にいる人から聞いたことがあるんです。こういうことを皆さんがご存じなのかどうかわかりませんが、例えば入所している子どものことを親が隠していて、そういう兄弟がいることをその子の兄弟が知らないでいる家とか。あとは親ではなくて後見人とか弁護士さんがついていて、そういう個人情報を知られたくないとか。それから障害は母親のせいだと思って、母親がすごく自責感を感じていたりする。それが年をとってから出産したお子さんであったりすると、自責感の度合いがものすごく高いのだという話も聞いたことがあります。

電話とか手紙とか、封筒の差出人はその施設名で出さないでくれと。事件と関係なくても、そういうことを常に気遣っている親御さんもいて、親はよくても、おじいちゃん、おばあちゃんがだめだという人もいます。

病院でも病院の人に呼び出しで、普通は確認のために名前をフルネームで呼んだりするけれども、「番号で呼んでください」とお願いしている人もいます。だから、自分の家族に気を使っていたりしている。日ごろからそうしている人が、ああいう事件が起きたりすると、取材を受けるとか実名を出すというのはほとんど無理なことだろうなと思いました。

座間の事件だと、この前、少女のご両親が手記を出しましたが、私はあれを読んで、たびたび家出をしていたという報道がされていて、すごくショックだった、と。何でそんな報道をしてしまったのかと思いました。

**質問** 澤と申します。共同通信の記者をしています。司法担当もそれなりにしたので、私のほうは、一方的にかもしれませんが、高

橋さんにいろいろお世話になりました。ありがとうございました。

いまのお話、あるいは実名、匿名の話などともいろいろ幅広く関係してくるのですが、できるだけ遺族の方が伝えたいこと、それからいま置かれている状況をどう改善するか。役に立つことをやりたいということは記者として当然あるし、それをもっとやっていかなければいけないと思うと同時に、それだけでは私たちの仕事が終わらないという難しさはどうしてもあると思うんですね。

つまり、誰のために書いているのか。いろんな人、いろんな立場があって、そこでわれわれも板挟みというか、例えば加害者の言い分というの中にはあったりする。でも、こんなことを書いたら被害者の人は嫌だろうなと思うこともあります。

誰のために書くか、あるいは誰のための報道倫理かということについて、例えば被害者とか遺族の方からみると、先ほど“記者の心意気”というとてもいい言い方をしてくださったけれども、われわれの考え方とか、何のためにということはどういうふうにごらんになるのか。そういうことでこれはひどいのではないかと思われたことなども含めて、矛盾というか、どうみえるのかということをお教えいただきたいなと思います。

**高橋** 私が取材を受けたときに、目の前にいる人は「その人」なんですね。名刺をいただいたときには、会社の名刺なので、あ、そういうところで報道されるんだとは思いつつも、対面している人は「あなた」で、結局はその「あなた」次第なんです。アバウトな言い方をすると、フィーリングみたいなものがあって。

ある人から聞いた話ですけれども、私がある取材を受けたら、その人も別の記者だったけど同様の取材を受けていて、取材後に記者が「これで一本書ける」と言っていた、と。取材された人がそんなことを聞いたらアウトですよ。もっともっと聞いてもらえれば、いっぱいいろんなこと、話が膨らんでいくと思うんですよ。

「ご主人の趣味はなんでしたか?」、「カラオ

ケでした」、「ああ、そうですか」、と、趣味はカラオケで終わるのか、「どんな歌が好きだったんですか?」、「どんなときにあなたとカラオケを楽しんでいたんですか?」とか、どんどん話が膨らんでいくのか、単純に話せばそういうことだろうなと思います。

**質問** 加えてうかがいたいのが、遺族の方にとってあまりうれしくないこと。遺族のことあるいは被害者のことではなくて、事件のことで、あるいは実名も含めて。だけど、われわれは、これは必要だ、世の中全体のために必要だと思って書かなければいけないときもあって、そういうのはどうみえるのかなと。

**高橋** それは人によって違うかもしれませんが。私などはオウムとは全然関係ない被害者だったので、何でこんな事件を起こしたのか知りたかった。最初にメディアというより警察に聞いたんですね。そしたら、警察の人が新聞を持ってきて、「こうなっています」みたいなことだったので、情報はいっぱい知りたかったです。いろんな細かいことを知りたかったというのがありました。

この前も河原さんにおみせしたんですけれども、3月20日からのいろんなところの新聞を集めて、もう黄色くなっていますが、いまでもスクラップしてとってあります。ですから、報道していただくことというのは、直後は読めなくても、やっぱり後々欲しい情報です。

### 事件報道の原罪

**河原** 澤さんがお聞きになりたかったのは、多分柳田邦男さんが「事件報道の原罪」と呼んでいることだと思います。被害者にとってつらい事実でも、事件や災害そのものを報じることをやめるわけにはいかないとか、そういう「原罪」を負っている。抽象的な言い方かもしれませんが、そういうことは覚悟してやるしかないんだと思っています。

自分にできることとしては、できる限り説明をするしかない。それで100%納得していただけたらとか、そういうことではないとしても、それを尽くすしかないと思います。

ある事件のご遺族から「この事件はこう呼ぶんじゃないで、こういう名前と呼んでほしい」と言われたことがあるんですが、その名前にするのはちょっと難しかったので、理由を説明して「申しわけないけれども、それはできません」と言ったことがあります。納得されたかどうかわかりませんが、そういうふうにはせめぎ合うこともあります。

また、私たちはどうしても確かめなければいけないですね。だから、相手にとっては痛いところを聞かなければいけないときがあります。さわれば相手が痛いとかわかっているところをさわって確かめていくしかないようなところがあって、痛いだろうなと思いやりながらそっと触れていくのか、何も考えずにバンとやるかという違いぐらいしかないのかもしれないんですけど、それを認識することはできる。

**質問** 東京新聞の加古と言います。きょうはありがとうございます。ここまで質疑も含めていろいろおうかがいして、結局のところ、なかなか解決は難しいなという感じを持っています。なぜかという、私自身、被害者のご遺族の取材などはこれまで何度かしてきて、例えば少年犯罪のご遺族の方であったり、先ほどちょっと出ましたけれども、9.11の被害者の方、5家族か6家族ぐらい話を聞いています。それは時間が少したった後で手紙を出したり、説得をして、それで話がうかがえる状態なのです。

問題なのは、河原さんの言葉で言うと急性期まで、そのあたりの報道をどうするか。座間の事件はそこが問われたと思うんです。では、それをどうしたらいいかということ悩んで、東京新聞でも社内で2回ほど勉強会を開いて、最初はフリーディスカッションして、次に弁護士の方を呼んで意見交換をしたわけですが、これからも続けていきたいと思っています。

特に座間の事件にフォーカスして、報道をごらんになったと思うんですけど、写真も含めてどんな印象を持たれたのか。それでいいのか、何か改善すべき点があるのか、そのあたりのことをおうかがいできればと思います。

**河原** 正解というのではないと思います。各社、判断が分かれましてし、それが自然だし、ただ、前より難しくなっていると思うのは、先ほど橋場さんが言われたように、ネットに出るとコントロールがきかなくなるということがあります。初報をそのままデジタルにも流すと、それがどんどん拡散していく。それに対する考え方としては、先ほど小松さんが言われたように、デジタルに出すものと紙面とを分けて考えるというやり方も選択肢としてはあると思います。

### デジタルと紙面を分ける方法も

私のいる新聞社では、事件報道の手引などをつくりながらそのことを議論してきて、フェードアウト方式というのを試みてきたわけです。一報においては、「もしかしたらうちの家族ではないか」と他の人たちも心配をしている中で、被害者は誰なのかという情報はあったほうがいいだろうと。裁判になったり、犯行がどんなふうに行われてきたかという話をするときには、必ずしも被害者のお名前はなくても伝えられるのではないかと。あるいは先ほど小松さんが言われたように、1回だけ書けば、繰り返し呼ばなくてもいいのではないかとということも考え、試行しました。

ですけれども、あるときある事件で、朝毎読3社が全く報道の仕方が違ったことがありました。幼い女の子が亡くなった過去の事件のことでお父さんが話された記事だったんですが、朝日は被害者匿名、お父さん匿名、顔写真なし、あとの2社はどちらがどちらか忘れましたが、1社は顔写真あり、実名。もう一社は顔写真なし、実名でした。

被害者の名前がなくても事件のことは伝えられるのではないかと、配慮して、私自身もそう考えて進めてきたのですけれども、パッと3つを見比べてみたときに、配慮の結果なのですが、被害者のことを伏せた紙面が一番冷たくみえたのです。そのことに悩みました。いまでも解決策はみつけれられていないので、加古さんがみつけたらぜひ教えてほしいと思います。

もう一つできることは、報道する側が迷った

り悩んだりしながら伝えただけけれども、どうだったでしょうということ、その過程を、もう少し発信してもよいのかなど。皆さん、あまり自社のことを報道するのは好まれないと思いますし、そういうことにばかり紙面を割くのはいかがなものかと思いますが。被害者勉強会などでも、「記者の人も悩んでいたんですね！」と大発見のように言われることがあり、私はそんなに何も考えていないようにみえるのかなどショックを受けましたが、やっぱりわからないですよ。

極論を言えば、全部匿名ということを選ぶ社会もあると思います。ドイツで起きた学校銃撃事件の1年後に取材にいったことがあります。地元紙の、事件からしばらくの報道は被害者十数人全部匿名で、何が起きたのか詳細はよくわかりませんでした。

社会の反応をみながら、刻々と考え、一個ずつ判断してやっていくしかないのではないかという気がします。

何の解決にもならなくて申しわけないです。

**高橋** 河原さんがいまの3つを比べたときに冷たいというのは、それは河原さんの感覚ですね。実際に書かれた人はどう思ったかというのは、また違うかもしれないですね。ホッとしているかもしれないし、本当にわからないことだろうと思います。

**河原** そうですね。それは聞いてみないとわからないと思います。

**司会** 何十時間話しても答えが出るものではないんですが、この会は続けてやっていきたいと思います。始まりの時間をちょっと遅くして、仕事が終わってから駆けつけられるような時間でまたやっていきたいと思います。

きょうは、お二人、本当にありがとうございました。(拍手)

文責・編集部